



Book Review

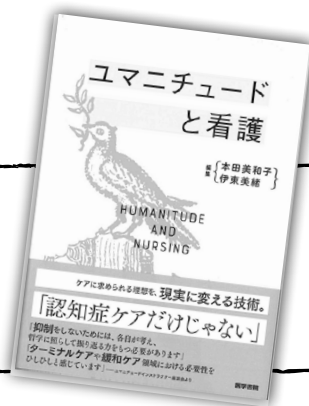
評者：横井郁子

東邦大学看護学部

ユマニチュードと看護

編：本田美和子・伊東美緒／本体：2000円＋税

発行：医学書院／TEL：03-3817-5657



多彩な実践風景を描き出す、ユマニチュードからの誘い

2013年3月、あるきっかけで本田美和子医師にイヴ・ジネスト氏とロゼット・マレスコッティ氏が講師を務める研修の見学の機会をいただき、途中から研修生に混じって実技指導を受けさせていただいた。あっという間の時間だった。楽しかった。そのときの参加者と桜の木の下で写真を撮った記憶がある。皆笑顔だった。

やってみたくなる。そして、笑顔になる。ユマニチュードの最大の魅力がここにあると思う。「自由・平等・友愛」を核としたユマニチュードの哲学。ユマニチュードを紹介する講演や書籍には必ずこの哲学の重要性が語られているが、本書にも、やはりその哲学が一貫していることをあらためて実感している。

ジネスト氏は講演の場が病院であれば、入院患者に直接かかわることを希望され実際にユマニチュードを実践する。職員や家族は患者のいつもと違う表情・言動に驚きつつも、笑い声が聞こえるその空間を共有しながらユマニチュードの哲学と技術を学ぶ。そんな現場を見聞きし体験した看護師たちとジネスト氏や本田医師たちとの座談会や実践録をまとめたものが本書である。異なる場・立場の看護関係者たちが、ユマニチュードというコミュニケーション技術がもたらしたそれぞれの体験に、看護の意味づけしていく様が本書によって知ることができる。

ユマニチュードは、もともと認知症ケアとして開発

されたが、「あなたを大切に思う」ということを伝える技術は認知症ケアの場だけが必要とするものではない。ユマニチュードを知り自分でもやってみたいと思った者たちが次に抱くのは「仲間と一緒に私の病棟で、施設でやってみたい」である。その魅力にふれることで、「病棟・病院として取り組めれば」と思案する看護管理者も少なくない。しかし、変化をおこすことは容易ではない。

そんな思いに応えるかのように、本書ではインストラクターたちの組織での取り組みも紹介されている。挿入されている実践風景の写真もとてもよく、わが事のように考えさせられた。本書の編者の一人である伊東美緒氏の施設導入に関する調査や学際的なユマニチュードに関する研究もたいへん興味深く、あらためて人間って複雑でおもしろいと唸ってしまった。

あるときは高度医療の場で患者の命を守り、あるときは自宅での暮らしを支援する看護職。そんな看護職には、家族でも実践可能で、笑顔になるマルチモーダルケア・コミュニケーション技術が、必要なのではないだろうか。本書をとおしてユマニチュードはそんな看護に協働しないか、と声をかけてくれたように感じている。私の答えはもちろん「Oui！」である。